

突は起こらなかったことが示されている。

第10章は、アフマド・ウマルの子の一人であるアブドゥルカリームに焦点を当て、アフマド・ウマルへの敬愛や共生の教えがどのように変化し、今日に受け継がれているのかを論じている。トリ集落の住民たちは、アブドゥルカリームをアフマド・ウマルの子として敬愛し、支えてきた。そして現在のアブドゥルカリームの仕事が、共生と融和を説き、世界平和を願って祈禱をあげることで、世界の縮図とされるトリ集落の平和を保ち、それによって世界平和を実現することにあると指摘されている。

終章は、全体の要約とともに、アフマド・ウマルの寛容さや聖者性から、愛と共生のイスラームが実現され、さらに子孫たちに受け継がれ、その時々時代に合った形が模索され続けていると結論づけている。

以上、全体を概観してきたが、本書の意義深い点としては第1に、ティジャーニー教団の新たな側面を提示したことが挙げられる。元来、ティジャーニー教団が排外的特徴を持つことは、第2章でも指摘されている(p.158)。しかし本書は、アフマド・ウマルの登場によって、ティジャーニー教団が面的な広がりをもせた事例を示した。教団普及の一因である導師たちによる病氣治しが、他の教団にも見られるのかについて今後比較検討されれば、病氣治しがエチオピアのティジャーニー教団独自の特徴であるのか、あるいはエチオピアのタリーカの特徴であるのか、明らかにされることが期待できる。

第2に、アフマド・ウマルの聖者性についてである。サハラ以南アフリカでは、タリーカが植民地闘争の中核を担い、植民地政府とは敵対関係にあった例が多い。しかしアフマド・ウマルは、相手が誰であっても無償の奉仕を行い、植民地政府の関係者に対しても献身的に奉仕し、友好関係を保った。このように、非暴力的な「戦略」を駆使することでムスリムコミュニティを守ったという事例は、イスラームの聖者像の新たな側面を提示したといえる。

第3に、第IV部が、第I～第III部のアフマド・ウマルを中心とした内容を受けて別の視点から考察し、本書の内容に更なる深みを持たせている点である。別の視点というのは、第9章ではヤアのムスリム・オロモと、ヤア周辺の民族との衝突回避、第10章では世界の平和の実現という、共同体の外に開かれたアフマド・ウマルの影響力である。このことは、アフマド・ウマルの影響力が、消滅するのではなく、時代の流れに合わせて変容し、受け継がれていることを示している。松波・吉田両氏の研究によって、今後の変化も明らかにされることが期待できる。

以上のとおり、本書の意義は十分に大きい。一方で気になった点は、スーフィーヤとワハビーヤの関係性についてである。本書では、近年増加傾向にあるワハビーヤが、スーフィーヤに対して敵対的態度を取ったり、聖者崇拝やスーフィズムを批判したり、数々の事件を引き起こしたりしている事実が述べられている(pp.398-401)。その一方でスーフィーヤ側からみたワハビーヤについての記述は、わずかな外見的特徴や態度、性格のみに留まっている(p.401)。本書の主題がスーフィズムや聖者であることを考慮すると、スーフィーヤ側から見たワハビーヤに対する考えや対応、発言について、より詳しく言及され、精緻に考察される必要があるであろう。特に、ヤア村とトリ集落の今日的状況を取り上げた第IV部に、スーフィーヤとワハビーヤの現在の関係性が考察された上で、愛と共生のイスラームが実現されていることが示されていれば、本書の結論はさらに説得的になったであろう。

とはいえ、本書は著者らの長年のフィールドワークと文献研究による成果の賜物であり、サハラ以南アフリカのイスラーム研究を大きく進展させたことに疑いはない。アフマド・ウマルから受け継がれた今後の聖者性の形や、周辺各地のタリーカや聖者廟との関係性など、本書から広がる研究の可能性は尽きない。今後のより一層の研究の進展を期待したい。

(藤井 千晶 学振特別研究員(RPD)・
大阪大学外国語学部非常勤講師)

本書は、世界各地に拡大しているイスラームが、当該地域にいかにか根付き、「共生」してきたのかを、スーフィズムを中心に考察した論文集である。また、本書は三菱財団から助成を受けた共同助成「イスラームの多文化共生の知恵——周縁イスラーム世界のスーフィズムに着目して」の研究成果の一部を成している。執筆陣は国内外で活躍するスーフィズム研究者であり、現代イスラーム研究や宗教研究を考えるうえで数多くの示唆を提供している。

本書の構成は以下の通りである。

- 序文 (東長 靖 イディリス・ダニシマズ 藤井 千晶)
- 第1章 周縁イスラーム世界からの共生メッセージ
——現代インドネシア・スーフィズムの試み (東長 靖)
- 第2章 宗教間の共生と国民国家
——インドネシアにおける「カーフィル呼称問題」から (新井 和広)
- 第3章 馬徳新による聖者崇拜批判とその後
——イスラームの中国適応再考 (中西 竜也)
- 第4章 18世紀パンジャブのスーフィー詩人ブッレー・シャー (Bulleh Shāh) の詩に見られる
共生思想について (山根 聡)
- 第5章 インド共和国におけるスーフィズムと共生のイメージ (二宮 文子)
- 第6章 旧ソ連・ウズベキスタン南部のスーフィズムと民族間の共生
——ジャフル儀礼への注目から (和崎 聖日 アドハム・アシーロフ)
- 第7章 キリスト教徒・ベクタシー教団関係の理解
——宗教多元主義と諸宗教の一致 (ティエリー・ザルコンヌ 東長 靖・和崎 聖日監訳)
- 第8章 トルコにおける共生思想
——オスマン朝のミット制とユヌス・エムレの「72ミット観」(イディリス・ダニシマズ)
- 第9章 東アフリカ沿岸部におけるタリーカの共生と敵対 (藤井 千晶)
- 第10章 15-16世紀におけるスーダン西部の支配者と学者／聖者の「共生」関係に関する一考察
——共食と恩寵の逸話の分析を中心に (末野 孝典)

イスラーム諸学における叡智のうち、他文化と接触し、多文化のなかで共生するための代表的な役割を果たしてきたのが、イスラーム神秘主義とも呼ばれてきたスーフィズムである。本書が、スーフィズムをイスラームにおける「共生」の思想として捉えつつも、その実態を冷静に分析しようとする。こうした試みは、中東地域を中心に語られる——あるいは語ってしまいがちである——イスラームを、「周縁」から捉え直す試みでもある。それによって、我々が抱くイスラーム像なるものからの脱却を促す論文集となっている。

第1章「周縁イスラーム世界からの共生メッセージ——現代インドネシア・スーフィズムの試み」では、編者の一人を務める東長靖によって「共生」という視座からスーフィズムを考察するうえでの問題意識が示されている。東長が指摘するように、日本における「共生」とは、「あらゆる差異を認めようとして、対等に付き合おう」という意味での『共生』は日本独自の言葉遣い(1頁)である。それに対して、「イスラーム世界で共生にあたるアラビア語は ta'āyush (タアーユシュ) であるが、これは多民族・多宗教間の共生(いわゆる多文化共生)を指すことばであり、ジェンダーや障害などによる差異を乗り越えようとする試みはふつうは含意しない」(1頁)。すなわち、日本における「共生」に対する認識は、全ての人間の平等や和合によってもたらされる状況であるが、海外における「共生」は他民族や他宗教との争いを避けるための手段であったり、多宗派のあいだの調和・調停の帰結であったりする。こうした状況における「共生」は、いかに対立しながらもお互いに生き抜く方途を模索するののかという意味で、「共存」という言葉に近い。すなわち、「共生」は、現代日本人が抱くイメージよりも厳しく苛烈な現実への対応と言えよう。

東長はイスラームの聖典クルアーンにおける「慈悲・慈愛」に相当するラフマ(rahma)や「愛」を意味するフブ(hubb)、マハブバ(mahabba)、「イシュク」(‘ishq)を取り上げつつ、インドネシアにおける共生と愛を論じる。世界で最大のムスリム人口を有するインドネシアは、イスラームのみを国教とした国家ではな

い。全体の約87%を占めるイスラームに加えて、プロテスタント、カトリック、ヒンドゥー教、仏教、そして儒教もまた公認の宗教とみなされている。「インドネシア型イスラーム」(Islam Nusantara)を打ち出しながら、イスラームのインドネシアへの土着化を推し進めることによって、他宗教との調和を図ってきた。インドネシア政府は、急進的・過激的なイスラーム理解に対して、穏健的なイスラーム理解を打ち出すことで、インドネシア的イスラームを目指している。このとき、近代以降に批判的に捉えられてきたスーフイズムやタリーカは、イスラームの道徳的側面であり、イスラームの愛を伝えるために重要である。

第2章「宗教間の共生と国民国家——インドネシアにおける「カーフィル呼称問題」において、新井和広はインドネシアにおいて非ムスリムをいかに呼称するかという問題を取り上げる。イスラームにおいて、異教徒を表現する言葉として、「カーフィル」(kāfir)というアラビア語がある。この語は「神に感謝しない者」を原義とするが、日本語では「不信仰者」と翻訳されることが多い。新井は、インドネシアで宗教的影響力を有するナフダトゥル・ウラマー (NU) という団体が、2019年の大会時に提言した非ムスリムへの認識を取り上げる。そのうえで、先の東長論文でも触れたインドネシアの宗教状況において、イスラームによる他宗教への配慮に見られる「共生」への認識を明らかにしようとする。

非ムスリムに対して「不信仰者」(カーフィル)と呼ぶことは、「神学的暴力」(kekerasan teologis)を含みうる。それは、新井が指摘するように「異教徒もそれぞれ信仰を持っているわけであり、不信仰者と名付けてしまうことで自分の宗教以外を否定することになる」(15頁)からである。分析において、新井はインドネシア内に限定されたNUの提言を、インドネシアにおいて公認されている6つの宗教との関わりから考察する。つまり、「唯一至高なる神への信仰」ゆえに公認されている諸宗教のうち、イスラーム以外を「カーフィル」と呼んでしまうことは、インドネシア共和国という国全体の枠組み、さらにはムスリム以外のインドネシア国民の否定と分断につながるということである。したがって、「カーフィル」という存在はインドネシアでは問題となるが、インドネシア以外の国には当てはまらない。また、インドネシアは近代以降にスーフイズムからの影響を脱した。そこで、クルアーンや預言者のスンナを重要視する方向性に推移しているが、新井論文は、インドネシアという国家を諸宗教間の共生や共存から捉え直すうえで重要な視点を提供している。

第3章「馬徳新による聖者崇拜批判とその後——イスラームの中国適応再考」は、イスラームが、中国の文化伝統に適応しようと試みるなかで生じていたムスリム内部の分断に焦点を当てたものである。マイノリティとしてのイスラームは、中国社会や文化に適応するために、儒教の用語を用いながら異文化間の共生を試みてきた。この試みはいわば非ムスリムとムスリムのあいだを繋ぐ試みである。また先行研究もそうした試みを評価してきた。しかしながら、中西が考察するのは、非ムスリムとムスリムのあいだを架橋しようとした馬徳新の試みが、ムスリム同士の亀裂を生みだした点にある。

著名なスーフイーであるイブン・アラビーの思想を援用しながら、馬徳新は聖者崇拜を批判するとともに、マジョリティである非ムスリム漢人への反乱を企てるジャフリーヤ教団をも批判した。馬徳新による聖者崇拜批判では、イスラームにおいてばかりではなく儒教においても異端であると主張することで、非ムスリムにとってもジャフリーヤ教団が害悪であることを主張した。こうした馬徳新へのジャフリーヤ教団による反発は、馬徳新の弟子である馬聯元への襲撃などの実行使として現れた。それに対して、ジャフリーヤ教団による馬徳新や馬聯元への批判においても、孟子と朱子学における登場人物になぞらえながら、非ムスリムからの賛同を得ようとする。このように、多文化共生社会の実現においては中国ムスリム内部に分断をもたらし、双方の陣営が非ムスリム社会に対して敵対する中国ムスリム陣営の非を訴えた。中西は、中国社会へのイスラーム適応のなかで生じた中国ムスリム内部の対立に関して、単に多文化共生社会の実現という視点から扱うだけではなく、融和を目指した中国ムスリムの「社会的副作用」という歴史的経験にも注意を払う必要性を指摘する。

第4章「18世紀パンジャブのスーフイー詩人ブッレー・シャー (Bulleh Shāh) の詩に見られる共生思想について」は、現代の南アジアにおいても高い人気を有するスーフイー詩人であるブッレー・シャーの詩を取り上げ、彼が詠じた詩の中に見出される異教徒との共生の可能性を同時代の宗教運動から考察する。ムガル朝第3代皇帝アクバル帝は、絶対的な権力を有していたが、ファテプル・シークリーに講堂を設置し、ムスリム、ヒンドゥー教徒、ジャイナ教徒、ゾロアスター教徒、キリスト教徒を招いて討論することができ

るようにした。こうした企ては、「神の宗教」という名の下で、宗教間の対立をなくすことで統治を円滑にするためであった。こうした背景には、15世紀頃に活動したカピールの詩が「信愛」（バクティ）をうたい、宗教間の融和と共生を説いたことが関わっている。しかしながら、アフマド・スィルヒンディーのように、アクバルの考えに反発し、彼を無心論者として批判するムスリムもいた。

サイイドの家系に生まれたスーフィーであるブッラー・シャーは、異教徒的要素を排除する「正統派」に対して批判する詩を詠んだ。彼は神と人間の間を恋愛神秘主義的に描き出した。山根によれば、彼の詩中の表現にはシヴァ派やバクティの影響を読み解くことができるという。ブッラー・シャーの詩は、18世紀のパンジャブにおいて、イスラームがバクティやスィクの思想の下で内在化され、同時に南アジアにおける文化的・宗教的要素を吸収していったことを示している。山根は、神への一途な思いを詠んだブッラー・シャーらスーフィーによる詩は南アジアにおけるイスラームの浸透に大きく貢献するとともに、平和裏なイスラームへの改宗も促進したことを指摘する。

第5章「インド共和国におけるスーフィズムと共生のイメージ」は、多様な集団を擁する現代インドにおいて、寛容さを体現したスーフィズムがいかに関与のイメージを維持するに至ったかを考察する。二宮は、2010年以降に設立されたと思われる All India Ulama & Mashaikh Board (AIUMB) と、インド首相モーデーのスピーチから、インドにおけるスーフィズムの語りを分析しようとする。AIUMB はインドや世界の平和のための呼びかけや、スンナ派のスーフィー文化の普及を目指して設立されたものである。同団体のホームページでは、「多元的」や「寛容」などの共生に関わる語彙が用いられている。これらの語を用いることによって、AIUMB は自らに対する理想的イメージをホームページ上に体現しようとしているとも言えることができる。

さらに、モーデー首相は、イスラームが世界の文明の進展に大きく寄与してきたことに言及するとともに、スーフィズムを平和や多元性など「イスラームの顔」として位置付ける。インド国内の諸宗教の信仰者に加えて、非信仰者もまたインドの一部を成している。言い換えれば、多文化共生社会においてはあらゆる宗教が全体の一部を成す。テロなどを含む分断の危機に対しては、イスラームの原則に基づいたスーフィズムが大きな役割を果たすことが述べられる。ただし、この背景には、暴力的対立へのムスリムの不安感を軽減するスピーチとなるように、AIUMB 幹部からの要請を受けていたことによる。二宮が指摘するように、調和的な共存や共生を成立するためには、権力者が利害調整に向けて意識的に関与する「善き調停者」として重要な役割を果たす可能性を有している。

第6章「旧ソ連・ウズベキスタン南部のスーフィズムと民族間の共生——ジャフル儀礼への注目から」では、旧ソ連・ウズベキスタン南部の山岳タジク人社会で行なわれている「ジャフル」(Jahr) という儀礼を取り上げ、スーフィズムからタジク人とウズベク人の共生関係について考察する。「ウズベク人」という近代以降につくられた民族は、以下の3つの集団、すなわち遊牧民という帰属意識を失ったテュルク系(定住ウズベク人)、タジク語を話した定住民(タジク人)のうちテュルク語を話すようになった人々、20世紀初頭まで遊牧民としての部族意識を有していたテュルク・モンゴル系の元遊牧民(遊牧ウズベク人)によって構成されていた。考察の対象となっているウズベキスタン南部はタジク人と遊牧ウズベク人が長らく共生してきた地域である。したがって、文化的にも互いに交流があり、本稿が扱っているジャフル儀礼においても同様である。

ジャフルとは、「ズィクリ・ジャフル」や「ジャフリー・ズィクル」、すなわち「声高のズィクル」と呼ばれ、スーフィズムの流れを汲んだ民間医学という特徴を有している。したがって、ジャフル儀礼を行う者はスーフィーである。中央アジアにおける様々な民間信仰は、ソヴィエト政権下での反イスラーム政策や反民間医学政策の影響を受けながらも、ジャフル儀礼は1940年代以降の見直しによって緩和された結果として保持された。和崎とアシーロフは、ジャフル儀礼を行なう3人にフィールド調査を実施し、その全貌を明らかにしている。ジャフル儀礼を行うスーフィーは、神の美名(アッラーは99の美名を有するとイスラームでは一般的に理解されている)の連祷である「声高のズィクル」などから成る一連の手順を行ったり、独特な調息法から神の美名を唱えつつも、大声を上げながら不幸や痛みが去るように、彼の導師の名前を唱えながら神に祈る。結論において、和崎とアシーロフは、近代医療を補完する役割を果たしてきたジャフル儀礼の対象は、タジク人だけではなく遊牧ウズベク人も含まれていたという意味において、「名医」としてのスー

フィーの存在がタジク人とウズベク人の共生を表わす証左となっていることを指摘した。

第7章「キリスト教徒・ベクタシー教団員関係の理解——宗教多元主義と諸宗教の一致」においては、スーフイズムの集団化した形態であるタリーカ(「スーフイー教団」としばしば翻訳される)のなかでも、ベクタシー教団に焦点を当て、彼らのキリスト教理解について考察している。イスラームでは、先行するキリスト教への批判がしばしば行われてきた。それに対して、反戒律主義の一潮流である極端なシーア派に出自をもつベクタシー教団は、キリスト教徒とムスリムの交流を各時代において奨励してきた。オスマン帝国におけるベクタシー教団の他宗教への認識に関して、ザルコンヌは宗教多元主義と「諸宗教の一致」という2つの態度から捉えようとする。

第1の宗教多元主義的な状況に関して、ベクタシー教団はキリスト教徒らと親しく交わりながらたすけ合ってきた。旅行記や聖者伝では、イスラームとキリスト教それぞれの聖者の共有、饗応、儀礼の共有、伝説の共有など両者の良好な関係が描かれている。第2の諸宗教の一致に関して、この概念は「永遠の哲学」に等しい哲学的態度であるが、諸宗教を超越し宗教の核心に到達することを目指すものである。具体的には、キリスト教徒にしてベクタシー教徒になった者たちを指す。ザルコンヌは、このことを「二重信仰」と呼んでいる。ベクタシー教団のグノーシス的で反戒律的な側面がキリスト教徒たちを魅了し、キリスト教の信仰を維持しながらもベクタシー教団に入信したのである。結論において、ザルコンヌは宗教の外面的次元に関心を抱かず、内面的核心へと向かったベクタシー教団は、今日でもなお他宗教との共生の態度を開いていることを示唆する。

第8章「トルコにおける共生思想——オスマン朝のミット制とユヌス・エムレの『72ミット観』」では、トルコにおいて著名なユヌス・エムレを取り上げ、彼の72の「宗教」(ミット)に現れたトルコ社会における宗教の共生について考察するものである。オスマン朝期の諸宗教の共生はよく知られているが、ダニシマズは政治システムではなく、スーフイズムという思想的内実を考察することの重要性を指摘する。

「72のミット」という表現については、諸説あるがクルアーンやハディースなどに由来すると考えられている。ユヌス・エムレの他宗教への見方については、イブン・アラビーの「存在一性論」や「諸宗教の一致」の考え方に類似しているとダニシマズは指摘する。諸宗教として認識されているミットも、絶対者の存在論的な顕れとして理解されるということである。また、ユヌス・エムレは本当に神を愛する者は、72のミットにも自らの愛を捧げることの重要性を説く。ユヌス・エムレの説く共生思想のなかには、自らの信じる宗教の神のみに愛を貫くのではなく、神に対する愛を、神を信仰する者たちに対する慈愛へと昇華し行動する原動力を見出すことができよう。

第9章「東アフリカ沿岸部におけるタリーカの共生と敵対」では、今日では住民の99%がムスリムとなったザンジバルで、カーディリー教団やアラウィー教団などのタリーカが根付き、民衆がイスラーム化していく過程のなかで見られる共生や共存、ならびに敵対を考察している。民衆がイスラーム化する過程では、タリーカの修行方法であるズィクリ(アッラーの名前を繰り返し唱える修行法)や、マウリディ(預言者生誕祭や預言者賛歌)において、ダンスや太鼓などの民衆に受け入れられやすい要素が用いられた。こうした視点は、スーフイズムを通してイスラームが「共生」しながらも、次第に優位になっていったことを示している。

カーディリー教団は、バグダード出身であったアブドゥルカーディル・ジラーニーを祖として成立した。カーディリー教団は平等主義を通して解放奴隷にも広く支持され、多くの人々がカーディリー教団に加入した。スーフイズムを通して、社会的な再統合が推し進められ、共生社会が導かれた。また、カーディリー教団は東アフリカで多くの免状(イジャーザ)を与えたため、結果として女性も含めた多くの指導者が誕生した。さらに、アラウィー教団は、イスラーム諸学の知を他教団のメンバーに開いた。その結果、アラウィー教団に由来するイスラーム諸学の知が普及し、広くムスリム全体に共有されることになった。その一方で、ローカル化したズィクリの一部は、サラフィー主義の台頭や個人的な敵対関係などを理由として批判された。ザンジバルでは今なお130以上のタリーカの活動拠点が存在している。藤井は、タリーカが彼らの「正しいイスラーム」の模索のなかで共生と敵対を繰り返しつつザンジバル社会で機能し続けるであろうと結論付ける。

第10章「15-16世紀におけるスーダーン西部の支配者と学者/聖者の「共生」関係に関する一考察——共食と恩寵の逸話の分析を中心に」は、ソンガイ王国を中心としたスーダーン西部の学者/聖者が、彼の有す

る神の恩寵ゆえに、食事を共にする——共食する——ことを求められた事例に注目し、世俗権力と宗教権威との関係性について考察するものである。西アフリカにおいては、「聖者」に相当する呼称として、「モリ」（マンデ語）、「モーディボ」（ソニンケ語）、「セリン」（ウォロフ語）などがある。これらの語は、「聖者」を意味すると同時に、「学者」をも意味してきた（それゆえ、「学者／聖者」と表記されているのだろう）。神の恩寵（バラカ）を有しているがゆえに、尋常ならざる奇蹟（カラーマ）を起こす者として尊敬の念を集めてきたのである。

この学者／聖者が有する資質としてのバラカについて、末野は、呪詛譚や驚異譚として描かれる奇蹟を体現する能力としてのバラカと、民衆のみならず政治的権力者からも崇敬を誘発する機能としてのバラカの2点を指摘する。前者に関しては、学者／聖者との共食の結果として、戦死せずに生き残るという恩恵に与った逸話などが残されている。また後者に関しては、世俗権力であるスルターンが学者／聖者と食事を共にしようとするが、食事が中断される事例や、逆に食事を完遂することができる事例などが見られる。これらは、彼らが神からの恩寵を受けるための手段が、学者／聖者との交わりにおける共食という食事行為であった。結論において、末野は、共食の実現の可否を通して、宗教権力としての学者／聖者と、政治権力とのあいだの関係性——対立か共生か——が透けて見えることを示唆する。すなわち、共食関係は共生関係でもあるのだ。

以上、各章の内容を要約しつつ、各章が提示する共生の位置づけを確認した。通読して気づくのは、編者の東長が指摘したような「共生」という日本語がもつ理念的意味と、各章が扱う「共生」の現実的な内実との温度差である。つまり、私たちにとって、現実世界において共生することがいかに困難を伴うものであるか、という問題である。それゆえに、「共生」という未来志向で肯定的な語彙よりもむしろ、「共存」という現実的で妥協的な語彙を用いる方が良い場合もある。そうした状況でもなお、私たち人類の希望であり課題でもある共生は残されている。本論文集において、スーフィズムに現実世界の課題を克服するための積極的な意味を読み解くことができるのは、各章の執筆者がスーフィズムに積極的な意味を見出したからというよりはむしろ、スーフィズムが現代イスラームにおいて果たしてきた役割の重要性が改めて明らかになったからだと言えるであろう。この意味において、「共生」という視点からスーフィズムを読み解いた本書は、単なる記述的考察に留まっていまいがちなイスラーム地域研究の水準を、一段押し上げたものである。

また、これまで羽田正らによって指摘されてきた「イスラーム世界」という枠組みの脱構築に対して、「周縁イスラーム世界」という語を用いたのは興味深い。というのも、「周縁イスラーム世界」という語は、脱構築を織り込んだかたちで、新しい枠組みを構築しているからである。すなわち、執筆者の彼らは「イスラーム世界」なるものが存在しないことを十分に自覚している。そのうえで、「周縁イスラーム世界」と名付けることで、これまである種の権威性を帯びて語られてきた中心的な「イスラーム世界」を脱構築するとともに、敢えて「イスラーム世界」を語ろうとするのである。本書の優れた研究枠組みに対しては、研究を遂行していくうえでの着眼点を評価したい。

そのうえで、宗教学的な問題関心を抱いてきた評者からコメントを付しておきたい。それは、本書でも既に示唆されているところである「共生」と「共存」の関係性についてである。共生と共存の関係性は、理念と現実と言い換えられるだろう。日本的なコンテクストにおいて宗教的状况について言えば、古くは神道と仏教の神仏習合や、多神教的な世界観として語られてきた。それらは、仏教的な世界観と神道的な世界観が融合し、混淆した姿として描かれる。

日本の宗教状況の実際がどうだったかはともかく、こうした見方は、いわゆる「多神教的な宗教観」と捉えられ、宗教的に寛容な態度として一般的に理解されてきた経緯がある。それゆえに、「共生」という語には、他者への寛容という意味が内包されていた。その一方で、「一神教的な宗教観は宗教的に不寛容な態度である」という認識も存在してきた。しかしながら、現実の宗教的状况は、たとえ一つの宗教内であっても、寛容と不寛容とのあいだを行き来しつつ存在する。言い換えれば、一つの宗教であっても——本書に照らして言えば、スーフィズムという一つの現象であっても——、寛容で共生を希求する側面もあれば、不寛容で辛うじて共存できているという場合もある。

したがって、「共生」という枠組みだけでは、本書の題名が示す「イスラームの多文化共生の知恵」を十分に論じ尽くすのは困難なのではないだろうか。むしろ、先に評者が提示した「寛容／不寛容」という認

識枠組みも視座としながら、イスラームやスーフィズムを捉え直す必要があるのではないだろうか。事実、イスラームが寛容であるか不寛容であるかという問いは、エルネスト・ルナン(Joseph Ernest Renan, 1823-1892)がキリスト教やイスラームを論じる際に既に用いていた枠組みでもあり、また宗教学においても多元主義的な宗教状況を捉える際に用いられてきた鍵概念である。近代以降のイスラームに関する言説を踏まえるときに、既に論じられてきたイスラーム認識を踏まえつつ、スーフィズムにおける共生への視座に関する問題を設定することが望ましかっただろう。

とはいえ、各執筆者が試みたスーフィズムと共生という本書が投げかけた問いは、スーフィズム研究のさらなる展開のための扉を開くものである。アカデミックな水準を保ちつつ、この問いに取り組んだ類書は欧米も含めてほとんど存在しない。この点から見ても、本書は十分に意義ある著作である。スーフィズム研究のみならず、イスラームに携わる研究者には是非手に取っていただきたい。

(澤井 真 天理大学おやさと研究所講師)

末近浩太(編著)『シリア・レバノン・イラク・イラン』(中村覚監修 シリーズ・中東政治研究の最前線2) ミネルヴァ書房 2021年 xiv+257頁

本書は「シリーズ・中東政治研究の最前線」全5巻の1冊として、シリア・レバノン・イラク・イランという4ヶ国を対象に、中東政治の構造的変動の解明に取り組むものである。本シリーズは政治学と地域研究の方法を組み合わせるこの課題に取り組む点に特徴を有している。本書についてもその方針は貫かれており、執筆陣はこれらの2つの領域を横断して中東政治研究に取り組んできた研究者から成っている。

以下、簡単に各章の内容を紹介したい。序章「中東に生成される新たな『地域』——シリア、レバノン、イラク、イラン」(末近浩太)は、本書が扱う4ヶ国を一つの「地域」と捉え、その歴史的な生成過程を概観するとともに、この4ヶ国を一つの巻で扱うことの研究上の意義・射程を論じている。本章はこの「地域」が実態を有するに至る歴史的な過程の分析を通し、その背景に原稿の国民国家を揺るがす力学と、新たな「地域」を定着させる力学があることを指摘し、この「地域」において国家／非国家主体の混交が絶えず繰り広げられている実態を明らかにしている。このような視点をもとに、この4ヶ国の政治に関する先行研究の概観と各章の概要の紹介を行い、各国の政治が隣接諸国だけでなく、中東という地域を超えた様々な諸国にまで関係を広げて営まれているという、新たな「地域」の輪郭を描き出している点に、本書の意義が見出される。さらに、各論考が4ヶ国や中東の政治理解の深化だけでなく、新たな事例研究として政治学や国際政治学の理論へ豊かな示唆を与えるという点にも本書の貢献が感じられる。

第1章「イラン・日本関係——発展と衰退を繰り返す90年の歴史」(千坂知世)は、イラン・日本関係を主題とし、両国の国交が樹立されてから第2次世界大戦期の断交(1929~52年)、国交回復からイラン・イラク戦争停戦までの時期(1953~98年)、イラン・イラク戦争後~核合意(1989~2015年)という3つの時代区分を設け、両国関係の転換点、およびその背景を論じている。なお、第2の時代、すなわち国交回復からイラン・イラク戦争停戦までの時期について、節題には1953~98年という表記が見られるものの、イラン・イラク戦争の停戦年が1988年であることから、正しくは1953~88年を指すものと思われる。先行研究が国交樹立の歴史と経済分野における事例分析に特化する傾向があるという問題意識をもとに、本章の力点はイラン・日本関係の史的展開における政治要因の役割に置かれている。そうした着眼点から、イランを取り巻く国際関係、イランの国内政治要因の双方が描かれているほか、近年の特徴として、イランをめぐる中・韓の台頭と日本のプレゼンスの低下が指摘されている。

第2章「多文化主義——レバノンにおけるメディアの発達と分極化の進展」(千葉悠志)は、レバノンのメディアの「極度に政治化され、分極化された」状態に関心を持ち、そのようなメディアのあり方が形成された背景を論じている。本章は先行研究の「方法論的ナショナリズム」、すなわち、レバノンのメディアがもつばら国内的文脈に即して論じられるのみで、国外の政治集団や外国政府、投資家とも関係しながら形成されてきた事実を捨象しているという点に問題意識を置いている。そこで本章は、これら国内外のアクターの連